古高取通信

No.29

平成30年12月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1．活動の拠点を創る
2．古高取の知識を深める
3．古高取の魅力を伝える
4．次世代へつなげる

古高取を伝える会会報

目　次

平成三十年度定期総会　・・・・・・2
活動の記録　・・・・・・・・・・・4
十周年記念シンポジューム　・・・・5
十周年を迎えて　・・・・・・・・・7
窯元紹介　・・・・・・・・・・・・9
なんでも掲示板　・・・・・・・・・9

もう十一巡目

「古高取りを伝える会」の十周年について考えます。

朝日俳壇に「大根蒔く明日が昨日になる早さ」という句が目に止まりました。なるほど人生、目的を持てば時の早さを実感します。

そして次の歌も時という事を考えさせてくれます。

「回転寿司の皿が再び戻りくる　過去が未来に早変わりして」おもしろい歌です。十年間活動したから、かえって見えてきた問題、過去が未来に早変わりすることとは私達にとっては活動の拠点を創るということと、資料館建設です。

子供の遊び歌『かくれんぼ』の中で「もういいかい」「まぁーだだよ」から「まだ」と「もう」二つの間に今がある。つかめない鏡のように、いや虚像の鏡「まだだよ」をはっきりと形をもって表そうとする「もういいかい」の叫び声を力としたいのです。

仏教では十周年を十一回と数えます。十一巡目に入ったということです。いよいよ急がねばなりません。

鷹取　宗恵

平成三十年度定期総会

●平成三十年度定期総会
〈平成三十年五月十九日(土)〉
場所：直方市中央公民館
二階 第一学習室
記念講演：陶房青空間 細田延俊氏
「陶芸と私」

平成三十年度の定期総会は、活動報告・決算報告・活動計画(案)・予算(案)について滞りなく承認いただきました。

今年度は、会発足十年の節目として、様々な活動に取り組んで参りたいと思います。

末松登志子

壬生直方市長の来賓あいさつの骨子

理事 副島邦弘

平成三十年「古高取を伝える会」に来賓として直方市長壬生隆明氏をお迎えした。

市長の挨拶の中に、当会が求めていた古高取の発信することに関して、つぎのようなことが述べられた。

話をまとめてみると三点に要約される含蓄深い話しであった。その骨子は、

一．伊万里市の市民図書館を視察された時、図書館から市民に発信され、市民に役立てるものを発信する場としての位置付けとして、館内で〝伊万里学〟というコーナーを設けていて、伊万里焼のタイトルで全国の焼物の生産地とそれらの文献が並んでいた。その中に陶説（日本陶磁協会月刊会誌）が揃っていた。このようなコーナーは直方の図書館でも〝高取焼〟のコーナーはやれると思われるので早急に考えたい。

ただし、図書館は指定管理者を定めているのが問題ですが、動いてみたい。

二．総会の第三号議案の高取焼資料館の建設への促進について、「私も資料館ができたらいいだろう」と思っている。財政上の問題がありますので、早急には出来ないが保険センターが優先するため、何らかの複合施設が出来た折には高取焼の展示施設ができるように若干でも皆様の思いが実現できるように考えたい。

三．職員を九州国立博物館に、今年四月から二年間派遣して、専門分野以外の企画展示に関することを学ぶため派遣している。将来を見透し、今後多くの皆さんの活動にお役立ていただきたい。

これからの十年を示された第三号議案の中心議題を行政として、「行政が皆さんの活動を支えていきたいと考えています。皆さんの活動に対し、敬意を表します」と結ばれ、直方市の現状を伝えられた。

細田延俊氏をお迎えして

理事 副島邦弘

平成三十年度総会の記念講演として『陶芸と私』という演題で話しをいただいた。

細田氏は、子供焼物教室の窯焼と釉掛等を中心に実施されている陶房青空間の窯元である。

『陶芸と私』として話されたのは、自分の生きざまと陶芸のことを中心に、前列に製作された作品を二十点ほど並べられてのお話しであった。

前段は自分が陶芸に進むまでの道をユーモアを交えながら話された。後段では、自分の作品を説明された。二十数点あり、器は初期の作品から現在のものまで、釉調

の変化が見られるように並べられていた。大形の皿を中心に壺・徳利・皿・茶碗等の器で角型の茶陶に関する壁掛け等も見られた。

話しは、当会からは『陶工として生きる』という演題でお願いしたが、氏は「陶工」という名に引っかかったので、『陶芸と私』という題に変更した。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

私が窯を持ったのは、四十五歳(1995)で、家を建てようと思ったがお金が不足であったので、プレハブを建てて、そこに灯油カマ兼用の薪カマと電動ロクロを入れたので、早く窯焼きを行いため、土・日に窯焼と決め、サラリーマンでしたので、帰宅し夕食後午後八時〜十時迄は尺八の練習をやり、十時〜十二時は陶芸のロクロ廻しを行って、休日の土・日は前述の窯焼焼成で、一週間の予定が進んでいきますので、自分自身が農民に近い感覚をもつこととなりました。

七年前から副会長の鷹取さんの紹介で、子供焼物教室の小学六年生の作品の高台削りや釉薬掛け、焼成を行っています。家内工業の工場の感じが、毎年六月頃からやってくるわけです。これを中心に一年間がまわっていると感じている今日今頃です。私も若い頃は役者になったら面白いだろうなぁと思ったことがありました。それに近い感覚は陶芸・やきものがもっていると考えて、陶芸に手ほどきを受けたのが生産部本部に勤めていた時でした。やきものについては瀬戸物という磁器ものが中部から東北・東国で呼ばれ、西国では土物を唐津物と磁器を伊万里（有田）と称しています。どうも瀬戸物(磁器)には、番町皿屋敷の怪談話で、”やきもの“に恐怖感をもっています。それはワレル・コワレル・ワレモノというマイナスイメージからです。それでもやきものをやるようになっていたかというと、自分の一生の道を求めるためでした。

私が生まれた昭和二十五年（1950）には朝鮮戦争がはじまった年で、日本では特需景気となり復興が早まり、国民全体が上昇思考へ移行していく中で、青春期を向かえて悶々とした時期で、就職してからも同じ気持ちでした。

その頃、インドを廻りました。その時、虚無僧姿の日本人が尺八を吹きながら流している姿に感激しました。外国でも己の意思で世俗を超越した態度に!!

この人が陶芸家で尺八を吹きながら旅をしているという。福岡県の人であった名を竹島さんといった。三年後八王子に古家を買って陶芸生活にはいっています。この人に尺八の手ほどきと、陶芸というものの考え方を教えられ、尺八の技量を高めたいと思い石山氏を紹介され師事しました。石山氏は詩書に長けた文化人でした。私は仕事の余暇に感田にあった市の青少年ホームにて行われている陶芸教室に入り、ロクロ廻しが好きで指先の集中によって粘土が変化することに喜びを覚えました。

それと併行して図書館でやきものの歴史等調べ、出張の折には、博物館や美術館を巡り見聞を広げ、また骨董店を訪ねて、目をこやしていきました。この青少年ホームで七年間に得た技術とその目を基礎に、感田に窯を持ちました。

その時は嬉しくて、早く焼きたくて仕事から帰宅して夕食後二時間尺八を練習し、その後夜半までロクロを廻して作品をつくり、土・日の休日には窯焼きを行ったわけです。

(作品を見せながら説明がはじまった。)

私は、伊賀焼で重文の破袋水指を評価しています。左右対称ではしっくりこないですね。織部風の

歪んだもの、窯の中で自然な釉を生みひびが入るものの美、陶器の唐津風の作品を造りたかった。しかし窯の構造が違う窯であるため、この窯を使ってヤキシメの作品を造りたくなり、酸化焼成を試みたわけです。あいは釉薬や材料を用いてヤキシメ風のものができました。これが西部工芸展で入選したものです。それから天目釉に着目して天目を研究しましたが、作品は失敗作が多く、窯の安定がみられず、どうしたら窯自体の安定が得られるか、陶芸家の先輩達に作品を見せて意見を聞きました。内ヶ磯の吉田浩さんに見せますと、カマの状況は一回一回相違する燃焼の状態や釉薬の化学変化等によってカマ焼の感じ方を会得し、酸化焼成や還元焼成等によっても材料の良し悪しでも変化し、面白い発色の器ができるのだから、安定的な窯は分どまりが良いカマが一番であると言われました。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

作品の説明を入れ天目茶碗は小服で軽く仕上がっていた。鉄釉系の大皿・鉢にも趣があり上手の仕上がりでした。

陶芸家としての趣は、陶芸を学ばせるということが一般的で、粘土を練って、ロクロを廻して作品を造り乾燥させて釉を掛けて焼く、そして作品として仕上がってくるの循環であると輪廻感を示された。趣深い話しでした。

活動の記録

●子供焼物教室（焼物部会）

〈平成三十年六月〜十月〉
場所：直方市内の小学校

本年度の六年生は493名在籍し、無事すべて終了しました。

また出来上がった作品は、第七十二回筑豊美術展に出展。上頓野小学校では、地域の文化祭にも出展して圧巻でした。

「第一回」
〈平成三十年六月四日(月)〉
場所：直方西小学校

「第二回」
〈平成三十年六月十六日(土)〉
場所：直方東小学校

「第三回」
〈平成三十年六月十七日(日)〉
場所：直方北小学校

「第四回」
〈平成三十年六月二十一日(木)〉
場所：感田小学校

「第五回」
〈平成三十年六月二十二日(金)〉
場所：直方南小学校

「第六回」
〈平成三十年六月二十三日(土)〉
場所：中泉小学校

「第七回」
〈平成三十年六月二十四日(日)〉
場所：上頓野小学校

「第八回」
〈平成三十年六月二十九日(金)〉
場所：福地小学校

「第九回」
〈平成三十年九月七日（金）〉
場所：植木小学校

「第十回」
〈平成三十年九月二十九日（土）〉
場所：新入小学校

「第十一回」
〈平成三十年十月五日（金）〉
場所：下境小学校

●高取焼基礎研修講座（学習部会）

〈平成三十年七月～十一月〉
場所：えみくる（直方市中央公民館横）

本年度の「高取焼基礎研修講座」は「利休茶会記」をテーマに三回を実施しました。残りは、来年一月中旬予定の「まとめ講演」と「現地見学バスツアー（三月予定）」です。途中からでも参加できますので、皆様ご参加くださいますようお願い致します。

「古高取を伝える会」設立十周年記念シンポジューム

●高取焼のルーツを訪ねる

〈平成三十年十月二十一日（日）〉
場所：直方市中央公民館一階 大会議室

高取焼は、黒田長政が朝鮮出兵の際に連れ帰った陶工八山に窯を直方の鷹取山麓に築かせたのが始まりとされています。

しかし、陶工八山に関する資料も少なく、どんな人物だったのか、出身は何処なのか、そのルーツは明らかではありません。このようなことを含め、高取焼の歴史、現在の高取焼の状況、そして未来の高取焼について皆で考えてみましょう。

第一部（十時三十分～十一時五十分）は、DVD上映で以下の二本を上映。

（1）高取焼のルーツを訪ねる
（2）炎の人高取静山

第二部（十二時～十二時三十分）は、高取焼出土品解説を中央公民館二階の郷土資料室で実施。

またその間に焼物教室を十時三十分～十二時二十分、呈茶席を十二時二十分～十三時二十分まで実施。

第三部（十三時三十分～十五時）は、メインのシンポジュームで一時間三十分の予定であった。

シンポジュームは、総合司会に当会理事の永富さんの発声で始まった。

最初に当会会長の開会あいさつ、その後、来賓のあいさつをいただいた。直方市長壬生氏、福岡県県会議員香原氏、直方文化連盟会長能間氏の各位から祝詞をいただいた。その後、シンポジュームに移った。司会はコーディネーターを当会理事の副島が引き継いで、パネリストに東峰村小石原鼓の高取焼宗家十三代高取八山氏、福岡市の味楽窯十五代亀井味楽氏を迎えて始まった。

韓国での視察結果を踏まえながら、初代八山が生活した場所は、黒田長政・父の如水が守って駐屯した倭城である慶尚南道の機張・梁山の近くの高霊郡の八山里周辺ではないか？また、高取焼の発祥の窯の永満寺宅間の趣に似ている景色であったと感想を述べられた。

　参加者は約六十人ほどで、熱心に聞き入っていた。また恒久的な施設が欲しいですね!!と

　「古高取を伝える会」設立十周年記念のシンポジュームは無事に閉幕した。

副島邦弘

	平成２０年度	平成２１年度	平成２２年度	平成２３年度	平成２４年度	５年度
学習部会	テーマ：内ヶ磯窯跡出土物について まとめ講演：講師 田村悟氏 「内ヶ磯窯の出土品について」	テーマ：遠賀川水系が果たした役割 まとめ講演：講師 日隈精二氏 「日本の美意識と精神性 ～茶陶の根本にあるもの」	テーマ：宗湛日記 まとめ講演：講師 副島邦弘氏 「神屋宗湛日記」 ■神屋宗湛の遺跡を訪ねて散策	テーマ：福岡県の焼き物概説（近世） まとめ講座：講師 西谷正氏 「最近の考古学事情 ～古代から近世まで」 ■博多寺町散策	テーマ：食の文化史 まとめ講演：講師 宮崎克則氏 「遠賀川絵図・福岡城下町絵」 ■福岡城周辺散策	テーマ：茶の初見から利休切腹まで まとめ講演：講師 中野等氏 「文禄・慶長の役
焼物部会	■市内小学六年生対象焼物教室 ■チューリップフェアー呈茶 ■高取焼出土品展示	■市内小学六年生対象焼物教室 ■直方の宝 発掘品と高取焼伝製品比較展示	■市内小学六年生対象焼物教室	■市内小学六年生対象焼物教室 ■古高取・古唐津展	■市内小学六年生対象焼物教室 ■いこいの村で陶芸	■市内小学六年生対象焼物教室 ■黒田官兵衛 直方歴史紀行発行
その他・全体・広報部会	■定期総会：講師 副島邦弘氏 「文化遺産としての古高取の継承」 ■宅間窯跡清掃・紅葉ウォーキング ～福智山ダムで団子汁～	■定期総会：講師 小山亘氏 「織部好みと内ヶ磯窯開窯」 ■紅葉ウォーキング・畑公民館で ■秋月バスハイク	■定期総会：講師 副島邦弘氏 「宗湛と織部」 ■紅葉ウォーキング （福智山ダム～明元寺）	■定期総会：講師 永富政英氏 「町づくり推進と高取焼」 ■高取窯訪問 （永満寺窯・内ヶ磯窯・高取焼工房）	■定期総会：講師 高取八仙氏 「小石原陶工として生きる」 ■ひまわりキャンプ（ちょっくらふれ旅） ■窯跡探訪ウォーキング （内ヶ磯～もとどり広場）	■定期総会：講師 渡久兵衛氏 「上野焼陶工として生きる」 ■直方の宝・古高取の鑑賞

十周年を迎えて

本年度、当会が発足して十年が経過しました。この機会にこれまでの活動を振り返り、今後十年、二十年とつなげていきたいと思います。

会の名称の由来

古高取とは、宅間窯―内ヶ磯窯―山田窯（八山が蟄居）の時代に焼かれたものの総称であり、茶の湯の世界では広く愛されています。

直方市には、発祥の宅間窯や貴重な発掘・調査が行われた内ヶ磯窯があり、その歴史や文化は貴重な宝です。

ちなみに、山田窯の後、八山が蟄居をとかれて開いた白旗窯では遠州高取として名を高めました。

「古高取」を伝えることで地域発展に寄与するため、発会当初から次の活動の四本柱を立て、三つの部会を中心に活動を続けてきました。

以降に、主な活動年表と役員の感想を掲載させていただきます。

紙面の関係で、載せられなかったものも沢山ありますが、ご了承ください。

平成２５	～豊臣政権の大陸侵攻」 ■福岡市内散策		（ちょっくらふれ旅）
平成２６年度	テーマ：官兵衛と宗湛の茶 まとめ講演：講師 中野等氏 「黒田官兵衛と六端城」 ■福岡西公園散策	■市内小学六年生対象焼物教室 ■官兵衛プロジェクト・五千人茶会 ・花公園高取焼展示	■定期総会：講師 亀井味楽氏 「高取焼の魅力。～陶工として生きる」 ■福岡散策 西皿山を訪ねて ■小石原・秋月バスツアー ■里山で野焼き体験・六年生全員
平成２７年度	テーマ：戦国武将とお茶の背景 まとめ講演：講師 松岡克則氏 「筑前における茶陶」 ■唐津市内 （飯洞甕窯・名護屋城）	■市内小学六年生対象焼物教室 ■ゆた～っと直方節句まつり・江戸時代展参加	■定期総会：講師 高取八山氏 「高取焼宗家十三代。 ～陶工として生きる」 ■読売新聞筑豊賞受賞
平成２８年度	テーマ：信長の茶会記 まとめ講演：講師 中野等氏 「朝鮮陶工の歴史」 ■唐津市内 （旧高取邸・唐津城・御茶盌窯跡）	■市内小学六年生対象焼物教室 ■熊本地震 復興支援バザー （七月・八月）	■定期総会：講師 石原祥詞氏 「陶工として生きる」 ■県民文化祭オープニングイベント （中間ハーモニーホールで作陶） ■筑豊美術展七十周年に参加
平成２９年度	テーマ：千利休の生涯 まとめ講演：講師 下川達弥氏 「筑前における茶陶」 ■波佐見バスツアー・寺内邸	■市内小学六年生対象焼物教室 ■高取焼大茶会 ■九州豪雨復興支援バザー （七月・八月）	■定期総会：講師 宮原隆次氏 「陶工として生きる」 ■理事研修・みやこ町歴史民俗資料館 ■味楽窯三百年記念ルーツをめぐる旅 ・三百年記念シンポジュームに参加
平成３０年度	テーマ：利休茶会記 古文書から読み解く まとめ講演：講師 島田光一氏 「遠州高取と白旗山窯」 ■熊本小代焼バスツアー（予定）	■市内小学六年生対象焼物教室 ※今までに約五千三百個を作陶 5355 ■高取焼大茶会 ■設立十周年記念シンポジューム ～高取焼のルーツを訪ねる	■定期総会：講師 細田延俊氏 「陶芸と私」 ■ほっぷ・すてっぷ・キャンプ作陶 ■ちょっくらふれ旅 ■筑豊美術展に参加 （当会設立十周年記念）

活動の四本柱
一、活動拠点の構築
二、古高取の知識の学習
三、古高取の魅力の発信
四、次世代への継承

十周年を迎えて考える事

会長　隅田 知明

早いもので「古高取を伝える会」結成後、十年を経過いたしました。

当初からの課題の一つである「拠点づくり」は、最初の一歩が踏み出せない状態ですが、これからも高取焼資料館の建設促進を、地道な要望を続けていかねばなりません。

博多の町中にある味楽窯では、薪で窯を焚く事が出来ないとのことですが、高取焼の陶工たちが、年に一度くらい、高取焼発祥の地で登り窯での窯たきが出来る環境を作りたい。

更に、福智山ダムの湖底に沈んだ「内ヶ磯窯跡」の可視化など、直方のまちづくりに寄与する活動に取り組みたいものです。

事務局長　末松 登志子

十年の歩みを作成するにあたり過去の資料を再度見直す機会を得ました。

この十年のエネルギーは、この先十年とても考えられませんが、四本柱の一つ（次世代につなげる）子供達が陶芸学習の後の感想の中に次世代がこの歴史をつないで行ってくれることを期待できるような発言がよく出てくるようになりました。とても嬉しく子供達から元気をもらっています。継続は力です。

一覧表に載せられなかったものも沢山あります。幼稚園の陶芸教室とお茶会、三学期マイ茶碗でのお茶会、ちょっくらふれ旅陶芸体験など。

またこの間、悲しいお別れもありました。向野敏明市長、荻迫先生、山本先生。

荻迫先生との一番の想い出は、発足の年の秋の一日、福智山ダムの上で団子汁といもの天ぷら、忘れられない想い出です。いつもやさしく私達の大きな支えでした。

山本先生は、学校の陶芸教室に来ていただいたり、６００ｇの陶芸の土を作るのも奥様といっしょに手伝っていただいていました。

学校に行けるのが「楽しいよ、嬉しいよ」といつも言ってくださっていました。

向野市長のことは、会報十九号（平成二十七年三月号）にお知らせを掲載しました。

この十年間、頑張ってきたなぁと振り返りました。

理事　永富 セツ子

本会が発足して十周年を迎えた。

その間私が携わってきたことは、焼物教室で子ども達や地域の方々に直方が高取焼の発祥の地であることを伝承していく活動であった。

また私自身も古高取の歴史を学び窯跡を探訪して廻り高取焼のことを深く知り得ることができた。

特に小学校の焼物教室での自作の茶碗でお茶会をすることが定着したきたことは、この十年間の大きな実績となり喜ばしい限りだ。

高取焼の魅力を発信しつつ、もう少し関わっていこうと思う。

理事　向野 志津絵

高取焼発祥の地が直方だという知識だけはありましたが、高取焼変遷の歴史等は全く知りませんでした。古高取を伝える会で色んなことを知ることが出来て大変良かったと思います。

これからも研修会や小学校の陶芸体験等を通じて、直方市の宝である古高取焼の歴史等を多くの人に伝えていければと思います。

会計　吉田 佳代子

十年の間、いろいろな行事に参加しました。

中でも印象に残っているのは、毎年直方市内の小学校六年生が焼物教室で作ったマイ茶碗でお茶会をしたことでしょうか。

緋毛氈を敷いた教室に慣れない正座で、自分でお抹茶を点て和三盆の干菓子をいただく姿を目にした時、日本伝統文化の茶道を子供達が大切にしてくれたらと願い・・・。

これからも微力ではありますが手伝いを続けたいと思いました。

窯元紹介

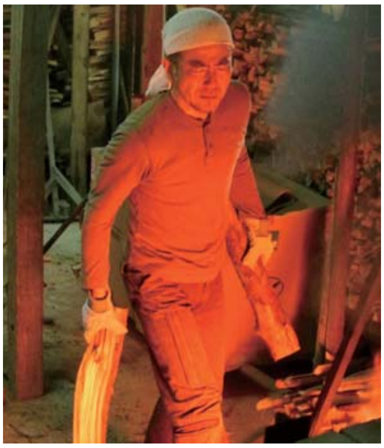
上野焼宗家　渡窯

第十二代　渡　仁

上野焼は、慶長七(1602)年、豊前藩主・細川忠興(三斎)が、文禄・慶長の役で招致した李朝陶工・尊楷に窯(釜ノ口窯)を築かせたのが始まりと伝えられています。

尊楷は地名にちなんで名を上野喜蔵高国と改め、利休七哲の一人であった三斎好みの格調高い茶陶を献上し続けました。細川家の豊前統治は、肥後に移るまでの三十年間と短いものでしたが、この間に上野焼の確固たる礎が築かれたのでした。尊楷は藩主の移封（国替え）に従って、寛永九(1632)年、肥後熊本(八代)へ移りましたが、子の十時孫左衛門と娘婿の渡久左衛門が上野に残り、新藩主となった小笠原家のもと、皿山本窯で上野焼を継承していきました。

四百年という悠久の歴史の中で、時代と共に趣を変え洗練されてきた上野焼。その背景には、先人達の計り知れない労が刻まれています。



渡窯は、現在、十二代 仁により古くて新しい伝統を創り続けております。

～・～・～・～・～・～・～・～

先日、渡窯を訪問して話を伺いいましたので、ほんの一部だけですが紹介させていただきます。

私は初め、上野焼は高取焼の兄弟みたいなものかと漠然と思っていました。と言うのは歴史的背景や場所が宅間窯に近かったこと、遠州七窯の一つと伝えられていたことからですが、実は似たようなところはあっても、やはり違う焼物だったのです。それは藩が違うので当り前のことだったのですが、細川忠興、尊楷、小笠原忠真など、あきらかに高取焼とは違う人物名が最初に出てきました。

また、高取焼の窯場は福岡藩内を転々としましたが、上野焼は藩主の国替えがあったにも関わらず現在の地にとどまって歴史をつづってきました。この違いが、現在の窯場としての認知度の違いに繋がっているのかなと思いました。

更に話しを伺っていると、私が今まで見たこともない器や変化に富んだ作品なども出てきて、私の知識不足を痛感させられました。

最後に、釜ノ口窯は、全長41ｍにもおよぶ登り窯だったそうですが、その窯跡の調査は昭和三十年に十日間という短期間のもので、十分な資料があるとは言えないそうです。渡さんは、釜ノ口窯の再調査などが行われれば、更なる発見があるかも知れない。上野焼の発展にも繋がるかも知れないとおっしゃっていました。

今回、上野焼や歴史の話で時間が経ってしまい、渡さんご自身のことはあまりお尋ねできませんでした。申し訳ございません。

上野焼宗家　渡窯　十二代　渡　仁

〒八二二－一一〇二
田川郡福智町上野三〇六五
電話　〇九四七－二八－二一七五

なんでも掲示板

●ほっぷ・すてっぷ・キャンプ

（地域対象焼物教室）

〈平成三十年八月四日(土)〉
場所：きこりの森（旧福智山ダム事務所）

青少年育成市民会議が市内の小学生を対象に募集した夏休み野外活動キャンプで、午前中のスケジュールに続き、午後から陶芸教室を行いました。

作品は自由で、お皿・お茶碗・花瓶・帽子など子ども達の個性的な発想に驚かされました。

八月末に出来上がり、直方市中央公民館のロビーに展示していただきました。

この様な活動も今後続けて行ければと思いました。

●第七十二回 筑豊美術展出展

〈平成三十年十一月二十三日（金）
～二十五日（日）〉
場所：直方市中央公民館

第七十二回 筑豊美術展は、一期、二期、小中学生展と分けて開催されました。小中学生展に、焼物教室で製作したマイ茶碗を展示させていただきました。

●金剛山もととり保全協議会

（ちょっくらふれ旅）
〈平成三十年夏・秋〉
場所：金剛山もととり広場

平成三十年度も「ちょっくらふれ旅」に参加しました。

◎あじさい園で陶芸体験
２０１８年（夏）
◎里山においでよ
七月二十八日（日）
（虫取り、川遊び、森林浴）
八月四日（土）
２０１８年（秋）
◎晩秋の里山においでよ
（落ち葉の林をハイキング）
十二月二日（日）

里山の自然にふれることの出来る楽しいプログラムです。体験の後は青空の下で食事（山のご馳走ランチ）。参加者も担い手も共に笑顔いっぱい、楽しさいっぱい自然満喫の一日を過ごし再会を約束して山を後にしました。

末松登志子

●高取焼と私

岐部 豊助

福智山の登山道の脇に小さな小屋を作り、そこでは何日か寝泊まりしながら焼物を探している人が居た。それは今から八十年前のことである。

法的制限の無い時代であった。私も戦後窯跡から破片をいくつか持ち帰っている。私の本家の東にお大師様と云う処有り、私共上頓野小学生の頃年一回（オコモリ）、その参道を整備をしていた。その坂道脇に甕が埋まっていて掃除をする度に甕を飾り付けていた。附近を見ると墓が有り黒田官兵衛の墓であることに驚いた。その甕は、この墓の水差ではないかと思われる。掘り出しある人に見ていただいたら白旗山の産であろうとの事であった。今は市役所の係に有ると云うこと。

私の居宅の建築記念として昭和四十年高取焼を購入した。静山窯の花器である。（高さ27ｃｍ）

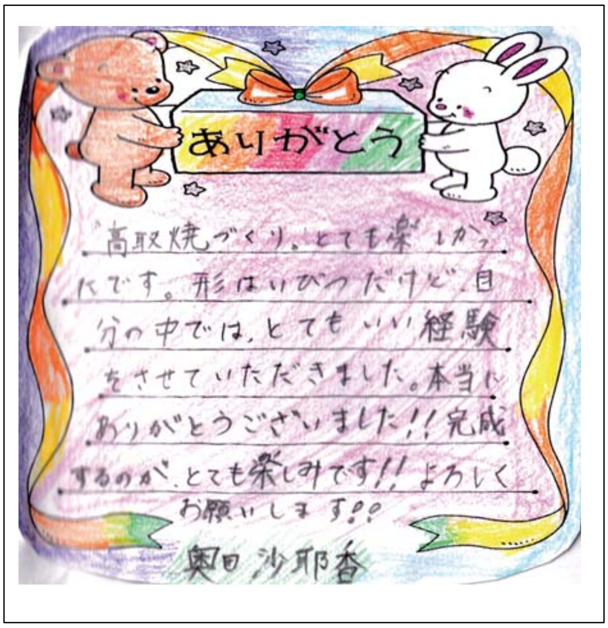
又私の米寿の記念として友枝窯の夫婦湯呑みを贈った。

娘の嫁ぎ先の父が小石原地区の野寄家であるが、その父の従兄弟が静山窯で働いていた記念として茶器を贈呈いただいた。三種一対の茶器である。現在、保存保持してある次第也。

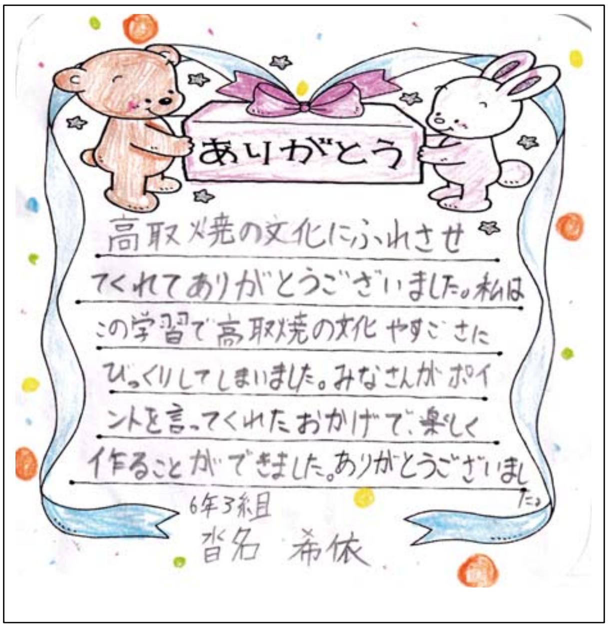
〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

現在、九十一歳、焼物が大好きで発会当初からの会員さんです。勉強会や講演会もいつも足を運ばれています。

直方東小学校、感田小学校、下境小学校の六年生から子供焼物教室の感想文をいただきましたので、次頁以降に少しだけ紹介させていただきます。

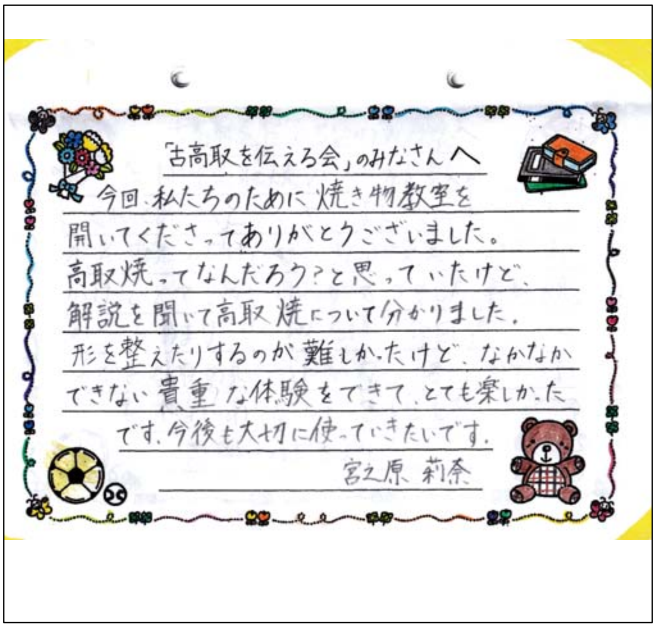


感田小学校　奥田 沙耶香

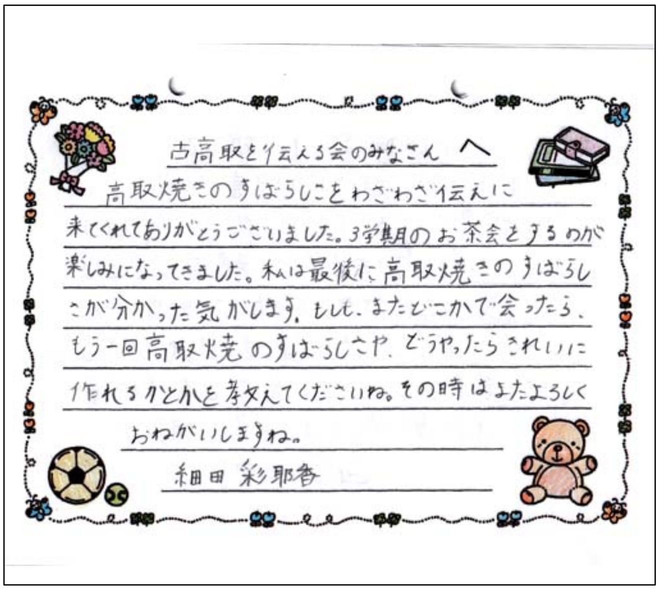


感田小学校　沓名 希依

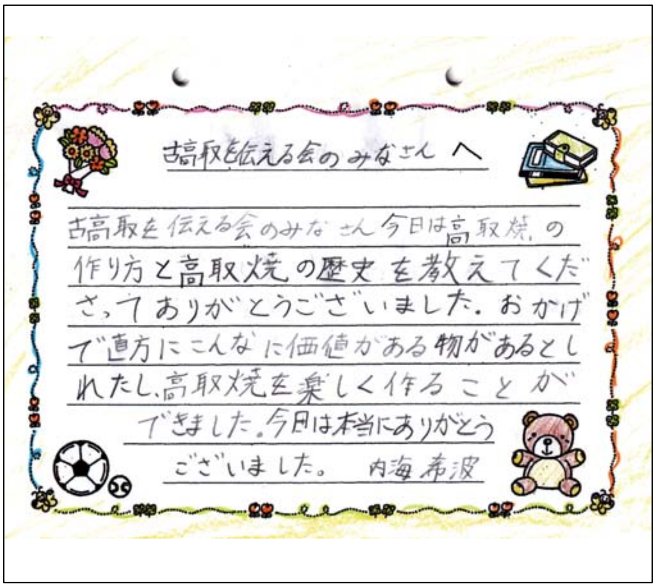
感田小学校　鶴森 藍理



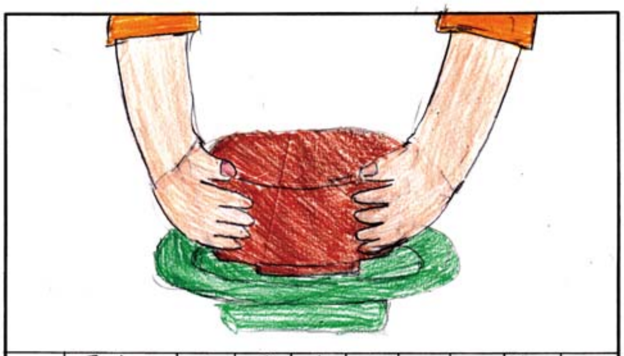
下境小学校　宮之原 莉奈



下境小学校　細田 彩耶香



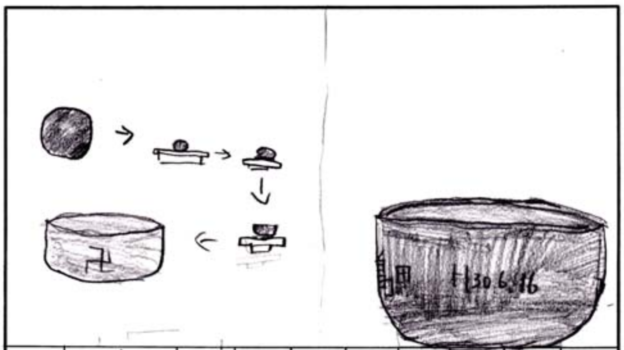
下境小学校　内海 希波



1604年の江戸時代から、高取焼が作られていたことを始めて知りました。朝鮮出兵に黒田長政が行った時に連れ帰った八山という人が高取焼を作って、400年ぐらいたっていたことが分かりました。八山という人が登りがまが福地山ダムの底にあることも始めて知りました。ボランティアの人たちが教えてくれたので、前作った時よりうまく作れました。完成したら、にくじゃがやスープを入れたりして、大事に使いたいです。ボランティアの人みたいにだれかに教える時はやさしい言葉で教えたいです。

6年2組 名前 持丸衿佳

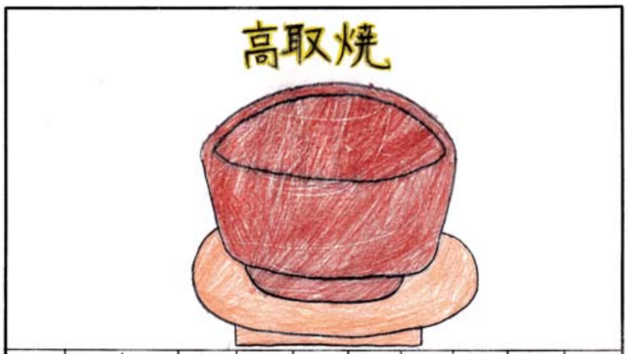
直方東小学校　持丸 衿佳



1606年から、今に高取焼が続いているということがすごいと思いました。作った物は、だいせつにしようと思います。またいつか、この体験をしたいです。いがいとかんたんだなと思いました。六年生全いんで、約70人くらいいるのに、ボランティアのかたはおいついていて、すごいと思いました。だから、ぼくも大人になったらこんなことのボランティアをしたいと思います。ボランティアの方に感謝したいです。

6年2組 名前 島田想太

直方東小学校　島田 想太



高取焼をつくって分かったことは、やっぱり始めてなので、ぜんぜんうまくできなかったことです。なので、ねんどを買って、練習して、またいつかリベンジしてみたいです。思ったことは、高取焼は、今からおよそ400年まえにつくられたことがすごいと思いました。もし次またできる機会があったらきれいにつくりたいです。

6年2組 名前 早川魁人

直方東小学校　早川 魁人

〈編集後記〉

先日、上野焼の窯元を訪ねました。上野焼は、福岡県内では有名な窯場ですが、直方はすぐお隣です。上野焼と高取焼、福岡県の焼物です。どうにか一緒に盛り上げることはできないものかと思いました。筑豊と言えば炭鉱後で何もないと思われがちですが、いや焼物があったよ！スイーツや美味しい食べ物もあるよ！と言いたいですね。

「古高取通信」会報・NO29

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
平成三十年十二月十五日

〈現在の会員数〉
正会員　五十四名（五十四口）
賛助会員　十八名（二十七口）
団体　一団体（一口）

〈マイ茶碗の数〉
六千三百五十五　個

〈事務局〉
〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL 〇九四九(二三)一三二一